
新世紀エヴァンゲリオン

～ 真実を司る男～

双慎覇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新世紀エヴァンゲリオン

～ 真実を司る男～

【Nコード】

N5347N

【作者名】

双慎覇

【あらすじ】

人類補完計画が発動され、一人赤い世界に取り残されてしまった少年《碇シンジ》は、真実を知り途方に暮れていた。そこへ、ライダー大戦を終え自分の世界へと帰ろうとしたはずの《天道総司》が現れる。この二人の出会いが、いつたい世界に何をもたらすのか。

追憶（前書き）

初めまして、双慎覇です

コレは私の処女作なので、かなり緊張してます。

この作品は新劇場版を観て書いたため、ホントに完結出来るかな、と心配です。

でも、ガンバって書いていこうと思うので、ご指摘などありましたらよろしく願います。

追憶

——これが真実？

——おい、お前。この世界で何があった？

——こんなくならない事の為に、みんなが……

——お前が俺をこの世界に引き寄せたのか

——僕に、僕に戦い方を教えて下さい！

——……力を手に入れて、どうするつもりだ

——行ってください！そして、もう一人の……をお願いします

——お前の想い、確かに受け取った

——……お兄ちゃん、だれ？

——おばあちゃんはこう言った。天の道を往き、総てを司る男。
《天道総司》

——碇シンジ君ね。乗って！

——違うな

——どう見たって碇シンジ君でしょ！

——師匠はこう言った。天の道を往き、真実を司る男。

——俺の名は《天道シンジ》

追憶（後書き）

実はコレ、プロローグですらありません。

次から本編を書いていきますので、

でわでわ

prologue (前書き)

プロローグ完成！

遅くなってスイマセン

> (| |) <

テーマは《出会い》です
お楽しみください

prologue

みんなはセカンドインパクトがあつたあの日、全てが変わつたと言つていた

でも、僕はそうは思っていない

全てが変わつたのは、母さんがいなくなつてしまつたあの日だと思う

あの日を境に、父さんも変わつた

僕を親戚の家に預けてしまい、何処かへ消えてしまつた

周りは僕を《母親殺しの息子》とか言つた

他の子達からもいじめられた

僕は何も悪い事してないのに

みんなキライだ

キライだ

キライキライキライキライキライキライキライキライキライキライ
キライキライキライキライキライキライ

そんな時だつた

ヤツらが現れたのは

僕、死ぬのかな？ つか、もう疲れたよ

でも、その時目の前が眩しく光った

そしてそこにはヒーローが立っていた

そのヒーローは真っ赤な鎧を着ていて、頭にはカブトムシみたいな角があった

あっという間ヤツらを倒したヒーロー

腰から何かが外れると、そこにはお兄さんが立っていた

「お兄ちゃん、だれ？」

僕はそう聞いた

すると、お兄ちゃんはゆっくりと右の人差し指を上に向け

「おばあちゃんはこう言った。天の道を往き、総てを司る男」
そしてその指で夕陽をを指さした

「天道総司」

「天道……総司」

「ああ、お前の名前は？」 先生には知らない人とは話しちゃダメと言われたけど、この人ならいいと思った

「……碇シンジ」

「そうか。シンジ、俺と一緒に来るか？」

コレが全ての始まりだった
そして僕は、記憶を手に入れた

prologue (後書き)

レポートキライ

でも、それだけじゃないんです
実はプロローグにしようと思ったやつがありまして、

……4000字超えた orz
もはやプロローグってレベルじゃねー……!!

て事でコレ書きました

サーセン!

> (_ _) <

1（前書き）

やっと完成しました。

とある部分についてかなり悩んでしまったOTZ

今回のテーマは 天の道を往く男 です
ではどうぞ

午前六時、京都市内にある純和風造りの屋敷から静かでゆったりとしたオーケストラの曲が流れ始める。屋敷の外見と流れる音楽はミスマツチに思えるが、どっしりと構えている屋敷が醸し出すオーラと音楽から感じ取られる繊細な雰囲気調和され、屋敷の周辺だけが町の中にあるとは思えない柔らかな雰囲気変わっていく。

ここは碇財閥会長《碇セイジロウ》が住む碇家の本家である。そしてその屋敷の台所では、少年が焦らず、素早く正確に料理を行っていた。

「ゴメン！シンジ君。寝過ぎしちゃった」

完成した味噌汁の味見を終え、盛り付けに入ろうとした時、慌てた様子で少女が台所に駆け込んで来た。

その様子を見て《シンジ》と呼ばれた少年は口元だけ笑みを浮かべた。

「おはよう、マナ。そんなに慌てなくても大丈夫だよ」

「……でも、ホントは私の仕事だよ」

使命感からなのか《マナ》と呼ばれた少女は落ち込む。

「昨日は出勤の後に会議だったんだろ？　っと、これで終わり」

味噌汁の盛り付けを終えて盆にのせてマナに差し出す。

「はいこれ、よろしく。俺は祖父さん達を起こしてくるから頼んだよ」

マナに渡すとシンジは台所を出て行こうとするが立ち止まる。

「つまみ食いするなよ、太るぞ」

「し、しないよ！」

今度こそシンジは出て行った。

余談だが、シンジが注意した時マナは器用に盆を片手で持ち、鍋に入っていた余りの煮物に手を伸ばそうとしていた。

「……いただきます」「」

「まったく、もったいないの〜。今日の朝飯を作ったのはシンジ、しかもサバの味噌煮だというのに」

結局、起きてきたのはセイジロウだけであり、他のメンバーは起きてこなかった。

「まあ、いいじゃないですか。その分シンジ君の作った味噌煮が食べられるんですから」

マナはそう言いながら二つ目に箸を伸ばす。

「それもそうじゃの。……む、シンジ。味噌を変えたか？」

味噌汁を一口飲み、味がほのかに変わっているのに気がつく。

「お、わかるか？ 具材によって味噌を変えるのがコツなんだ」

「え、ウソ!？」

慌ててマナは飲み直す。

「どうだ？」

「……分かんない」

「もう一度舌の特訓だな」

「はい」

師匠の死刑宣告(？)を受けてマナはうなだれる。

「かっかっか。マナちゃんも大変じゃの。ZECTの訓練時代は教官泣かせと言われておったのに」

「あー！ それを言わないでください!!」

マナは真っ赤になりながらやけ食いを始めた。

その様子を見てシンジとセイジロウは笑みを浮かべる。

「そっぴや祖父さん、ZECTの方はどうなってる？」

シンジの切り出した話にセイジロウの顔が少しだけ真剣になる。

「順調と言っていていいじゃろう」

「ベルトの方は？」

「マナちゃんのを抜くと一本完成した。すでに三本目の製作を開始しておる」

「そうか、例の機能の事も頼むな」

「分かっつる。じゃが保証までは出来んぞ」

「分かっつる」

そこで会話が終了し、食事を再開する。

「ごちそうさま！」

いつの間に食べ終わったのか、マナはそう言つとすぐに食器を下げに台所に行つてしまった。

「慌ただしい奴だな。食休みくらいしていけよ」
「シンジ」

セイジロウは悲しそうな声を出しながら話しかけてきた。

「なんだよ」

「サバがない」

「……は！？」

見るとサバの盛り付けてある大皿の上が綺麗サツパリなくなつていた。サバは七つあったのに

「マナだな」

「マナじゃな」

「フツ、フツ、——」

碇家のガレージの脇にはトレーニング専用の部屋がある。ここはZ ECTの為の施設ではなく、シンジ専用に使われた場所だ。シンジはいつも朝食が終わるとこの場所で鍛えている。

しかし、闇雲に鍛えているわけではない。その証拠に身長165cmと同世代では少し高めではあるが、体は引き締まっっていて無駄な筋肉が一切ない。

「ふー」

トレーニングを全て終え、備え付けのシャワーを浴びようとタオルと着替えの入っているロッカーを開ける。

引っかかっているタオルを取り、下に置いてある着替えを取るとジユラルミンケースが現れる。

いつもならこのままシャワーを浴びに行くはずなのに、何を思ったのかケースを慎重に取り出し近くにあった机の上にゆっくりと載せる。

ケースを開くとそこには金属のベルトが収納されていた。ベルトは普通より二回りほど大きく、明らかに私生活には必要のない物である。

「やあ、久しぶり」

シンジはベルトにゆっくりと話しかけた。

その話し方はまるで昔から友達であるかの様だ。

「キミはいつたい何時まで俺を待ち惚けにさせる気なんだい？」

当然ベルトからの返事はない。

「……そうだね。キミは時が来れば、だったね」

シンジはそう言いながらケースを閉じロッカーへと戻し、シャワーを浴びに行った。

「あゝ、サッパリした」

シャワーを浴び終え、母屋へと続く廊下を歩いているとマナを見かける。

きよろきよろと誰かを探している様子だったので声を掛けてみる。

「マナ、誰を探してるんだ？」

「あ、シンジ君！やっと思つけた」

どうやら探していたのはシンジだったらしく、シンジの元へ駆けてくる。

その手には封筒が握られている。

「はい、シンジ君宛だよ」

「何処から？」

するとマナの顔が真剣な表情になる。

「……NERV」

「ようやくか」

マナの答えにシンジは納得する。

逆にマナは少し不思議な顔をする。

「どういう事？」

「こっちの話だ」

シンジはそう言いながらセイジロウのいる書斎へと歩き始める。

「それよりも祖父さんの所に行こう、これからの事を話す」

「わかった」

「祖父さん、ちょっといいか？」

ここは碇財閥会長のいる書斎。

会社の重要な決定などもここでする場合などもある為、本来ならば入口に控えている秘書の誰かに許可を取るのだが、シンジは許可を取らずに入っていく。

マナはその後ろを付いて行くが、さすがに気まずいのか秘書達にペコペコと頭を下げながら入っていく。

そんなマナを見て、あなたも大変ね、と微笑み返す。

「なんじゃシンジ、いつも言っておるだろ、そんな事はどうでもいい、来たぞ」……ちよつと待っておれ」

書斎ではセイジロウが会社の書類に目を通している最中であった。一段落つけ、セイジロウは掛けていた眼鏡を外しシンジ達の方を向く。

「さて、話を聞こうか」

セイジロウのしゃべり方は仕事の時の口調のままである。

「NERVから招待状が来た」

シンジはそう言いながら封筒を渡す。

セイジロウは受け取った封筒をペーパーナイフで開け、中身に目を通す。

「コイツらは馬鹿かの」

それがセイジロウの感想であつた。

その感想を聞いて怪訝な顔をしたシンジとマナに見せる。

「うわゝ」

「……究極のアホ共だな」

見せられたのは手紙と写真であつた。

しかし、内容が内容だったので二人とも送り主の頭を疑つてしまつた。

まず手紙の内容、 来い ゲンドウ それだけである。

そして写真、 もういい歳の女性が屈んだポーズをしてピース^{ハート}している。おまけに胸元全開の所に矢印が書いてあり、 ココに注目

「シンジよ、 本当に行くのか？」

セイジロウは呆れながらシンジに聞く。

「行くしか……ないだろ」

溜め息を吐きながらシンジは答えた。

明らかに覇氣がない。

「でも、 日付も急だよね。 二日後に第三新東京都市に来いだなんて」

「大方、 俺を見つけられたのが最近だったんだろ。 名字も変わった

しな」

「程度がしれるの」

他には入ってないのかと、マナは封筒を逆さまにするとカードが床に落ちた。

「コレってIDカード……だよね？」

「不用心だな」

「不用心じゃの」

この数分で疲れたのか、セイジロウは秘書にお茶を持ってくるように連絡する。

「祖父さん、エクステンダーはもう出来てるのか？」

「まだじゃ、と言っても例の機能の調整だけなんじゃがな」

「それじゃ自分のバイクで行ってくる」

「そうじゃの、エクステンダーは後で届けさせるわい」

ドアを叩く音がし、秘書がお茶を持ってくる。
それを飲み、一同一息つく。

「それじゃ、行ってくるかな」

「え！？もう行くの」

シンジの急な発言にマナとセイジロウは驚きを隠せない。

「『思い立ったが吉日』って言うだろ？」

「気を付けての」

「ああ。マナ、こっちは頼んだぞ」

「うん、まかせというて」

そう言いながらシンジはお茶を飲み干して書斎を出て行くところだが、セイジロウに呼び止められる。

「シンジ、コレを持って行ってくれ」

セイジロウはシンジにある封筒を渡す。

シンジは中を見て納得して、今度こそ出て行った。

二日後、シンジは待ち合わせの場所に来ていた。

傍らには愛車であるC B R 1 0 0 0 R R が停まっている。

「……完全に遅刻だな」

時計を見ながら呟く、約束の時間から既に十分が過ぎている。はつきり言って公務員、いや社会人失格である。

「仕方がない、N E R V のゲートまで行くとするか」

事前に調べていたため、大体の地理は把握していた。

非公開組織と言ったものの、N E R V のかなり甘いものであった。少し裏技を使っただけでゲートの場所や施設の見取り図が手に入ってしまうのだ。

「……ん？」

バイクに跨ろうとした時、囁くように風が吹いた。

ふと、風の吹いてきた方向をに目を向けると女の子が立っていた。だが、次に来た強風で思わず目を瞑ってしまい、次に目を開けた時にはいなくなっていた。

シンジは表情は不審に思っているような表情ではなく、まるで懐かしい人と再会したような表情であった。

しかしそれもつかの間、今度きたのは風ではなく爆音、そして爆風であった。

シンジは咄嗟にバイクの後部に括りつけてあったリュックを掴み免れる。

「俺のバイクが」

爆風の原因はいったい何だ、と目を向けると1キロほど離れたところで戦闘機と巨大生物が戦闘を繰り広げていた。

ちなみにバイクはさっきの爆風でおしゃかである。

「ほう、あれが使徒か」

シンジは呟いた。

普通の人間ならば慌てて逃げ出す場面だが、シンジは冷静に分析を始める。

「本当に通常兵器は聞かないんだな」

使徒も苛立ったのか、戦闘機に自身の腕を向ける。するとその先端からパイプのようなモノが打ち出され、戦闘機を貫いた。

飛行不能となった戦闘機はふらふらとシンジの方へと墜落して行った。

だがシンジはその場から動かず、じっとしている。

戦闘機が墜落し、破片などがシンジを襲おとしたが、その間に一台

の車が割って入った。

「遅れてごめん、碇シンジ君ね。乗って！」

たぶん葛城ミサトだろう人物が助手席を開けて声を掛けてくる。
その言葉に内心溜め息をついた。

「違うな」

「え、どう見たって碇シンジ君でしょ！」

シンジはミサトを無視しながらゆつくりと人差し指を天に掲げた。
ミサトはサングラスをしているため、その人差し指が太陽と重なり
輝いているように見える。そしてシンジの雰囲気にもまれてしまい、
今の現状を忘れてしまう。

「師匠はこう言った。天の道を往き、真実を司る男」

そしてゆつくりとその人差し指をミサトに向け、

「俺の名前は 天道シンジ」

1（後書き）

読んでいただいております。

前書きで書いた、悩んだ部分。

実はミサトをどうやって扱うかでしたwww

結局こんな感じに仕上げてみました。

次回もよろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5347n/>

新世紀エヴァンゲリオン

～ 真実を司る男 ～

2010年10月9日06時56分発行